[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　寺 谷 卓 馬

本研究は、増加する高齢の肝癌患者に対して、臨床的特徴や経皮的エタノール注入療法の成績を明らかにするため、114 例の 70 歳以上の高齢肝細胞癌患者について、後ろ向き・コホート研究を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 1985 年から 1990 年までの間は、患者の平均年齢が 60 歳で、70 歳以上の患者の割合が 14%であったのが、1996 年から 1997 年の間は、平均年齢が 65 歳で、70 歳以上の割合は 29%と高齢化が認められた。

2. 70 歳以上を高齢者群とし、70 歳未満を若年者群として臨床像を比較した結果、HBs 抗原の陽性率については若年者群で有意に高く、総ビリルビン値や血清アルブミン値といった肝機能に関連した臨床データは、両群間で有意差がなかった。しかし、最大腫瘍径については、高齢者群が平均 32mm と若年者群の 28mm に比べて有意に大きかった。

3. 肝細胞癌の再発率について、両群間で有意差は認められなかった。

4．　合併症率について、両群とも3％前後と低率で、両群間で有意差は認められなかった。

5．　Kaplan-Meier 法による初回経皮的エタノール注入療法からの生存率は、若年者群が5年で44.1％、10年で16.8％に対し、高齢者群で32.0％、7.2％と統計学的有意差を認めた。死亡に寄与する因子について、Cox の比例ハザードモデルで分析した結果、単変量および多変量解析でも、高齢者群であることが統計学的に有意な因子であることが判明した。

6．　心疾患や他臓器癌などの肝非関連疾患による死亡率は、若年者群で10.8％に対し、高齢者群で11.2％と有意差を認めなかった。

7．　若年者群の標準化死亡比は11.32であったのに対し、高齢者群で3.78となり、有意に低率であった。

以上、本論文は70歳以上の高齢肝細胞癌患者の臨床的特徴や経皮的エタノール注入療法の成績、死因を明らかにし、これまで報告の少なかった高齢肝細胞癌者に対する経皮的局所療法の合理性を示したものとして、学位の授与に値するものと考えられる。